

教育者と研究者

清 野 和 夫

文部科学省は日本の大学における研究力の現状として、論文生産の量と質が主要国に比較し低下していること、大学は日本の論文の約7割を産出しており大きな役割を担っていること、大学の論文数のうち科研費が関与している論文は増加していること、日本の大学研究者数は増加傾向にあるが25～39歳の若手比率が減少していることを挙げ、研究力の強化を図ろうとしています。今日の日本では、大学教員が学生の教育に加えて研究をすることは当たり前のことと捉えられていますが、今さらながら、大学教員は教育者なのか、研究者なのかを自分自身に問いかけてみました。

大学教員は教育者であり研究者である。

教育とは、「人を教え育てること」であり、教育を受ける人の知識を増やし、技能を身につけさせ、人間性を養いながら、その人が持つ能力を引き出そうとする行為を言います。この教育に携わる人を教育者と呼んでいます。また、研究とは、特定のものごとについて、人間の知恵を結集して、実験、観察、調査などを通して調べた成果に対して、その事実を深く追究し考察する一連の過程のことを言います。学術的研究は、新しい事実や解釈の発見であるがゆえに、得られた研究成果が新知見であることを他の研究者によって認めてもらうため、学会や論文で研究成果を公表しなければなりません。この研究に従事する人を研究者と言います。教育の目的は、教育基本法では「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」と定めています。また、大学の目的は、学校教育法により「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させること」と規定されています。そして、「その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」としています。そうすると、大学は教育研究の場であり、学生は研究に必要な知識や技術の教育を受けるということになります。では、学生を教育する教授はどのように定義されているのでしょうか。同じく学校教育法では、「教授は、専攻分野について、教育上、研究上又は実務上の特に優れた知識、能力及び実績を有する者であって、学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する。」と規定されています。大学が教育を行うだけの機関であれば、過去の学問を学生に伝達する場としかならないことになります。それでは最先端の学問を学生に教授することができませんし、次世代に向けての創造性や新しい学問体系の構築など、心が弾むような興味を学生にもたせることはできません。そこに研究が加わることによって、

これまでの学問体系に新たな血が注ぎ込まれ、新たな学問体系が築き上げられます。大学は、学生が自ら進んで学ぶところであり、教員は最先端の知識と技術を学生に教えみながら、未来を築き上げる人材を育成する教育研究機関なのです。そして、大学教員は教育者であり、研究者でもあり、さらに臨床系であれば診療に携わる医師であり、大学の運営に関わる実務者でもあるのです。

教育研究には教育者と学生との信頼関係が大切である。

それでは、大学はどのような視点にたって教育研究にあたればよいのでしょうか。ノーベル化学賞を受賞した野依良治氏は、「研究で大事なことは事実の発見ではなく、価値の発見である」と言っています。貴重な知見であっても、時代の流れに沿わない、意味がないと捨てられていくなかで、新たな価値を発見することが大切であると述べています。また、価値を発見するためには、自然科学だけではなく、人文社会学や世の広い教養と原理・原則を若い時に学んでおくことが必要であるとも述べています。本学のような医療系大学の教育においては、専門分野のみならず、人文社会系の幅広い教養を涵養することが大切になるということではないでしょうか。

教員が学生に手本を示すことは、実験、実習、研究、臨床など、すべての教育の場でよくあることです。この時に思い出すのが、山本五十六氏の格言です。上杉鷹山公の影響を受けたとされていますが、「やってみせ 言って聞かせて させてみて ほめてやらねば 人は動かじ」は私の教育の基本としているところです。学生に技術を教えるときには、自らが手本となって見せるようにしています。見せなくてもわかるだろうなど思っても、あえてやって見せることが大切なのです。そして、次には、自らがやっていることを学生にきちんと伝える様に言葉で説明し、言い聞かせることです。見せるだけで学生が理解することには無理があります。そして、今度は実際に学生にやらせてみるにより理解を深めさせることです。技術は理論の実践であるので、物事の理論をしっかりと教えたあとには学生にやらせてみるが必要なのです。しかし、学生は初めてやってみることなので、最初からうまくできることはありません。なんども繰り返しやらせてみて、手本に沿ってできるようになり、少しでも上達したなら今度は褒めてやることです。褒めるといっても、学生のやっていることが「手順どおりで間違っていない」、「それでいいんだ」ということを伝えることでよいのです。学生は褒められることで「認められた」と思うので、その後の人間形成にも繋がります。学生の教育は、「教えっぱなし」にしないで「育む」ことが大切であり、教える側と教わる側との信頼関係が大切なのです。

(奥羽大学学長)